



追悼 故 板野長八 名誉教授

板野先生（三月十三日御逝去）が北大から来任された昭和三十三年から御退官までの十一年間は、広大中国史学の黄金時代であった。先生と故今堀誠二教授の二枚看板が輝いていた。斯学の横綱、エースとはこのようなものかと実感する日々であった。大学紛争の真最中の四十四年春、先生が退官されるに際して、在香港の今堀教授は記念小冊子に特に寄稿され、「大戦中、文部省は東大法学部に国体学を設置しようとしたが、東大は東洋政治思想史に変更し、津田左右吉氏をあてた。しかし津田氏は例の裁判で去り、丸山真男氏が代って講じた。丸山氏も原爆症に倒れ、熟慮の末、板野先生に代講を委嘱した」とするエピソードを紹介し、「昭和後半期の東洋史学の碩学はわが板野教授である」と結ばれていた。

先生のお仕事の担当部分は昭和四十七年、岩波書店刊の「中国古代における人間観の展開」に集約されていて、後学者の道標となっている。しかし先生は大著刊行後、その出発点となった孔子以前に歩をすすめられ、殷周交替・周公の時代の考察、書経各篇の成立に全力を傾けられた。数年前、老子を周の史官の流れとし、商鞅・孟子をめぐるの五十年来の難問に解を得たと話されていた。だが天はその解を先生の手によってまとめる時間を仮さなかつた。先生御自身も無念であつたらうと想われる。またわが大学の声望に多大の貢献をされた碩学を失った悲しみも深い。今は旅立たれた先生の御冥福を祈るのみである。

（文学部中国史講座 寺地 遵）

